

旧橋上組 愛宕講についてまとめ

(2016年12月 府市場昔話同好会 三木 怜)

◎ 愛宕（あたご）講とは？

毎年1月23日に行われる旧橋上（はしかみ）組、（現在の1隣保と2隣保）で個々に行われている火除（よ）け、火伏（ぶ）せの行事です。

（現在の7隣保制は昭和15年と18年に編成されました。）

最近は23日もしくはそれに近い土曜日曜となり、場所も各戸持ち回りから公民館に代わり、平成に入って町内の料理屋で新年会を兼ねて盛大に行われるようになりました。

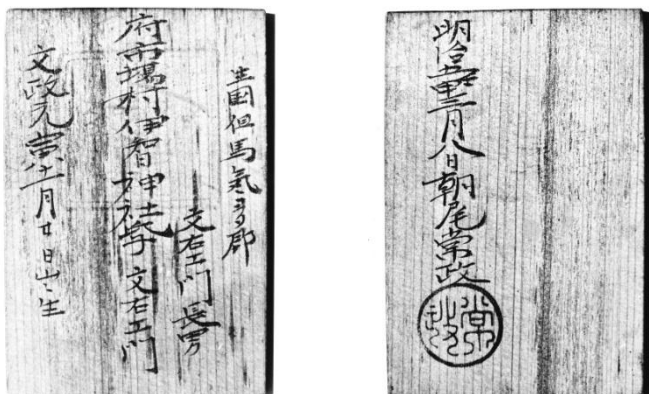
◎ 由来は手辺（てへん）大火！

始まりは、各集落に江戸・明治期から受け継がれてきた「伊勢講」でした。

伊勢講は組の各自が少しずつをお金出し積み立てて、くじや話し合いで代表がお伊勢さんに参拝し、帰参後は「どうむかえ」といってお札を受け取る慰労の会や翌年の代参者や当番が決められました。

百姓の移動が禁じられていた江戸時代から、伊勢参りは参拝目的以外に庶民の社会見学（観光）と文化交流の合法手段でした。

府市場村の伊勢神社参拝通行手形（明治初期 朝尾宮司発行）



当区では、戦後の昭和24年に経済事情が悪化し中止を余儀なくされましたが、いまでも形を変えて続けている集落もあります。

(厨子裏面の記事)



(明治・大正・昭和の伊勢講 覚え)



一方、**愛宕講**の記録は大正 14 年に始まり、現在に引き継がれています。
古老の覚書によると、大正 6 年 5 月 23 日午後 8 時頃、橋上 (はしかみ) 組内で起きた、手
辺大火に起因しています。

組内の大工小屋から出た火は、藁 (わら) ぶきの屋根が中心だった当時あつという間に燃
え広がり、5 軒が全焼、1 軒が半焼の大火災となりました。

その後、家が建て揃うまでに 10 年近くかかったそうで、愛宕講の開始時期と重なります。
1 月 23 日とは、伊勢講の時期である 1 月 11 日と手辺大火の 5 月 23 日に関係していますが、
愛宕さんの縁日 24 日と関連があるのかも知れません。

かつて伊勢講と愛宕講の双方が行われていたのが、昭和 24 年の伊勢講の廃止で、愛宕講だ
けが 1 月 23 日に引き継がれたようです。

(昔は東部の国府市場 (このいちば) に対し、府市場西部を手辺と呼びました)

(伊勢講から引き継ぐ厨子)



(大正 14 年始めの愛宕講覚帳)



◎ お講の意義は火の用心！

隣保代表が豊岡市内の小田井神社にお参りし、「愛宕神社火災防護攸」と書かれた愛宕神社の火伏（ひぶせ）札をいただきます。

愛宕講には大火を教訓として火除け火伏せの神である愛宕神社のお札を厨子に納め、各戸代表が二礼二拍一礼でお参りし、お供えと御神酒をいただき火の用心を誓います。

◎ 愛宕山、愛宕神社は「火迺要慎」の神様

愛宕山は京都市の北西にあり標高 924m の山で、古くから火伏せ・防火に霊験のある愛宕神社は各地にある愛宕神社の総本宮として知られています。

京都では愛宕神社からいただいた「火迺要慎（ひのようじん）」のお札を台所に貼ります。

当地でも船町にある愛宕山（鶴城跡）に鎮座されていたのが、いまは市内の小田井神社に摂社としてお祭りされていて、お札もここで授けられるようになりました。

また伊智神社境内の「五社」の一つに愛宕神社がお祀りされています。

◎ 昔はどんなスタイル？

当時は順番に当番宿を決め、当番によってお酒や料理が振る舞われるものの、途中で拍子木（かちかち）を持って定期的に夜回りを行っていました。

夜を徹しての行事なので、花札などの「ゲーム（ばくち）」も盛んで、新年行事としても長く伝えられてきました。

◎ お祭りに使う厨子や軸は？

いまお参りしている厨子（ずし）が新調されたのが昭和 6 年、組みうち「酒初」の竹馬春枝さんによって寄贈されました。

掛け軸はさらに古い大正初期のものらしく汚れや破れがひどいので、2013 年に総本宮「京都 愛宕神社」にお参りして、「愛宕大神」の軸をいただけてきました。

また、隣保長が預かっていた厨子や軸は 2011 年から公民館に保管していただいています。

(旧軸)



(新掛け軸)



◎ 今後引き継いでいきたいこと

火を使うことで生活する人間にとって、火事との闘いは宿命のようなものです。火元だけでなく隣近所の財産や生命を失うことになりかねない悲惨な出来事です。手辺大火から 100 年の時を経て、お祭りの意味を知る人も少なくなりましたが、時代が変わっても火事の恐ろしさや行事本来の意味を忘れずに火の用心に努めたいものです。

◎ 「匂うふるさと」

かつて橋上組に居住し大火に遭遇された菅村駅一氏は、豊岡市で印刷業を営み、昭和 21 年佐賀県伊万里市へ転居されました。

望郷の想いを込めて、大正期から戦中期の思い出を本にまとめられています。

同書の「手辺村繁盛記」に家並み図と家業の様子を紹介され、当時の状況やおのおののルーツを知る縁（よすが）ともなるでしょう。

労作「匂うふるさと」を始めとする「わが古里但馬」全 5 巻は公民館「なごみの部屋」でどなたでも閲覧できます。

(おわり)